

05

設計演習 I B

阪急六甲駅周辺に建つ小事業所

開講年次：学部2年生第1クオーター

[担当教員]

北後明彦（教授）中江研（准教授）ピニエイロ アベウ（助教）

[Teaching Assistant]

横田慎一朗（A67）永本聰（A67）田中惇（A67）

■課題とその趣旨

事務所建築（オフィスビル）は、近現代の都市・社会の代表的な建物類型（ビルディング・タイプ）であり、普遍的な性格を持っている。一方で、特に近年の社会的要請の変化や、業態の複雑化・特化に応じて、個性的な性格が個別に要求されることも一般的である。この課題では普遍かつ個性的なオフィスビルの計画・設計を求める。

今回の課題では、次の4つの観点からのアプローチを要求する。

- (1) 場所のコンテクストの解説
- (2) 内部から外部への考察
- (3) 街並み（景観）としての配慮
- (4) 生活空間としての諸室の提案（考察）

さらにこの課題を通じて、建築の空間感覚（特にスケール感など）と図面表現との具体的な関係について理解を求める。

■事務所の概要

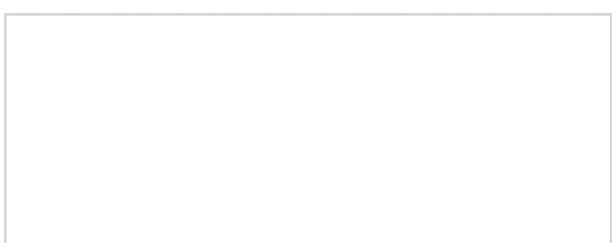
- ・このオフィスは特定の企業の自社ビルとし、その業種は、例えばファッションあるいはデザイン関連の企業等自由に想定すること。建物内に商品展示やプレゼンテーションのための空間を適宜設けてよい。
- ・當時 50～60 人が執務するものとするが、男女比、業務部門の構成等適宜想定すること。オフィスの機能は、主に企画・立案部門と管理・運営部門が中心で、商品等の製造・流通部門等は近くの別の場所に立地しているものとする。
- ・単なる業務空間というのではなく、地域と密着したプラス・アルファの機能を果たすため、展示、地域の催しなどの会場としての機能をもつた建物の提案し公開性、地域への寄与を何らかの形で具体化すること。

■敷地

- ・阪急六甲駅周辺の三か所（A,B,C）の敷地から一つの敷地を各自選ぶ。
- ・敷地面積はいずれも約 600 m² (20×30m) 程度であるが、形状と寸法の詳細は適宜想定する。
- ・敷地内の高低差は現状の地形を前提とする。
- ・周辺環境などの計画条件は適宜想定してよい。容積率指定は 200%。

■建築概要

- ・構造規模：鉄筋コンクリート造 3～4 階建てを原則とする。
- ・延べ面積：1,000～1,200 m²
- ・屋外に来外者用の 2～3 台のパーキングスペースを確保すること。



課題；敷地

■講評会

[OB ゲスト講評者]

駒井陽次（Style Agency、AC5）

石田崇（森崎建築設計事務所、AC8）

土養う 一肥料と農園を扱う事務所一

松岡 純加

阪急六甲駅と六甲八幡神社のすぐ側に建つ、肥料の事務所。土養う（培う）とは大切に育てるということ。緑に囲まれたオープンカフェ、視線の行き交う吹き抜け、外部の賑わいを感じとれるガラス張りの会議室などを通じて、地域住民と社員との絆を培う場を生み出す。



光の回廊

小西珠代

阪急六甲北に佇むカメラメーカーの事務所。中央を貫く三角形の光庭は、内部に光と自然の気配をもたらし、1階～4階を直線で繋ぐ階段は上下階の繋がりを強める。開かれた空間は人ととの繋がりをつくっていく。

光の回廊



自然体で在ること

道免尚子

地域と人を繋ぎ、自然体で仕事を楽しめる会社社屋を設計した。階段状の3階建てで、1Fのホールと3階バルコニーのビオトープで地域交流を図る。2階のオフィスはフリーアドレスを前提とし居心地の良さを考えたコの字型で、視線の抜けや緑との調和を重視した。

自然体で在ること

働くこと、それは本来喜びである。学問も勤労も生活も、何かを営むことは、人に刺激と充足をもたらすものだ。その恩恵を遮ることなく、不自然に力むことなく、長閑さと開放感を感じつつ、自ずと力を發揮できるようなオフィスを目指した。テーマの「自然体」は、人と勤労、人と建物、人と地域、人と自然、人と人、等、全てに対する理想的な向き合い方であると考える。

勤労に対しては充足を得、地域に対しては包容力を備え、人に対しては誇らず、無理なく、押し付けず。そんな日常を実現できる建物となることを願って設計した。

